

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2025年(令和7年)2月16日 日曜日

無料

第153号

毎月発行

発行 2025年(令和7年)2月16日 日曜日

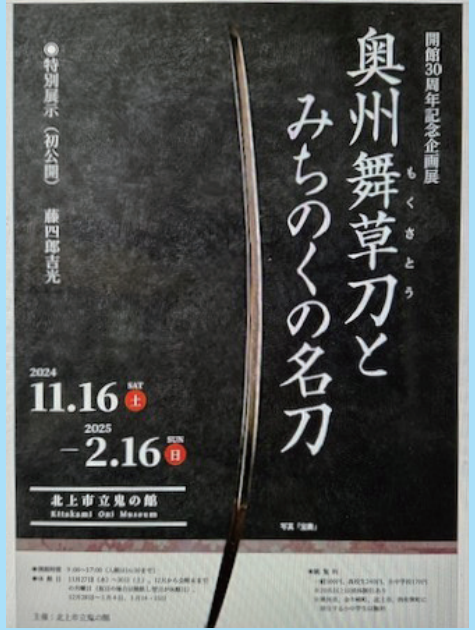
【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の大崎上映会は延期。新しい型制作に趣向を凝らすことを標榜。

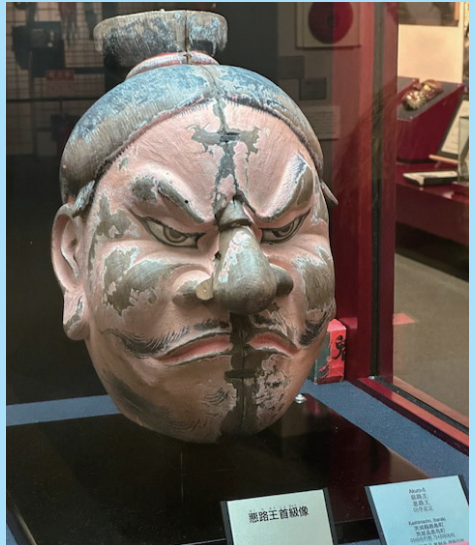
東北日本刀起源説探求は東北再興の糸口 日本刀は西日本で誕生との先入観がどのようにして作られたかをつぶさに見れば東北が背負ってきた歴史と真の東北アイデンティティーがはっきりと分かる

日本刀のルーツ論議と東北アイデンティティーと東北再興
なぜ東北再興を掲げる当新聞の一面トップに日本刀の話題なのだろうと不思議に思われる読者の方もたくさんおられるだろう。しかし、日本刀の歴史やその文化をより深く知れば、古代から東北が背負ってきた歴史、その文化が明確に見えてくるし、同時に、東北の再興への脱出口も見えてくると筆者は信じている。



は外国人にも人気の日本文化である。この日本刀のルーツを掘りていくと、リアルな古代の東北に出会えるし、さらには、ものすごく手ざわり感のある東北アイデンティティーにも出会えると信じている。筆者の考えを受け入れるか否かは別として、最後までこの記事におつきあいいただければ幸いです。

北上市『鬼の館』訪問
先月二十三日、岩手県北上市にある「鬼の館」を訪ねた。鬼の館は三度目である。とはいえ、真冬の訪問は初めてで、市内に前日に降った雪が残っていたので多少の不安があった。予想通り、レンタカーの古いナビ通りに走ったら、右折する脇道が雪に埋もれていて曲がり損ねた。そのおかげで、アイスバーン化している下り坂を恐る恐る走らねばならなかった。そんな場面からの訪問となった。今回の訪問を決めたのは、開館三十周年記念企画展の「奥州舞草刀とみちのくの名刀」を見学するためであり、友人の紹介でこの展示を知ったからである。筆者は、日本刀は東北がルーツとの映像作品を制



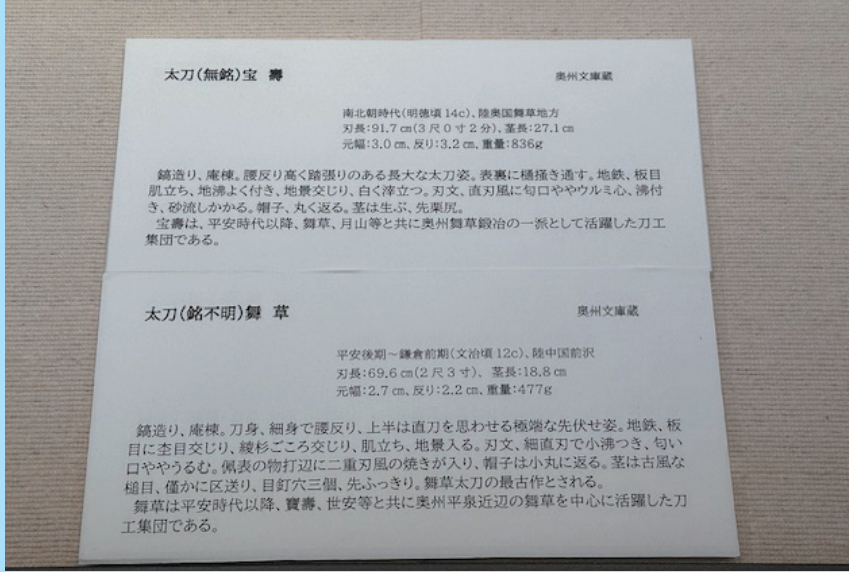
久しぶりに対面した悪路王



舞草集団が作刀した『宝寿』と『舞草』

作したこともあり、そのために東北の日本刀についていろいろ調べたこともあり、東北の日本刀ということを知れば、他の用事を投げ打つても出かける必要はないと思つた。また、東北と日本刀の関係については、新たな視点を得られるのではないかと

秘かな期待もあった。『鬼の館』とのご縁
筆者には実は、「鬼の館」とは残念なご縁があった。前述の筆者が制作した「日本刀は東北がルーツ」を表現する映像作品であるが、この映像のタイトルは「鬼がつくった日本刀」というものであり、このタイトルと内容であれば、「鬼の館」とも共通点がたくさんあり、映像作品のDVDにも興味を示してくれるだろうと勝手に思い込み、参考にDVD一枚を送った。しかし、筆者の思い込みを反して、DVDは「鬼の館」の趣旨とはあまり関係ないし、DVDの委託販売も出来ないかと断られてしま



『宝寿』と『舞草』の解説



短刀『吉光』

受付の職員は筆者制作のDVDを見ていた

「鬼の館」を訪問した際に入口で対応してくれた若い芸芸員風の人に私のDVDのことを聞いてみた。そうしたらDVDを見たという。製作者にとっては非常にうれしいことだし、「鬼の館」とは無関係ということで廃棄されたわけではないことを知った。

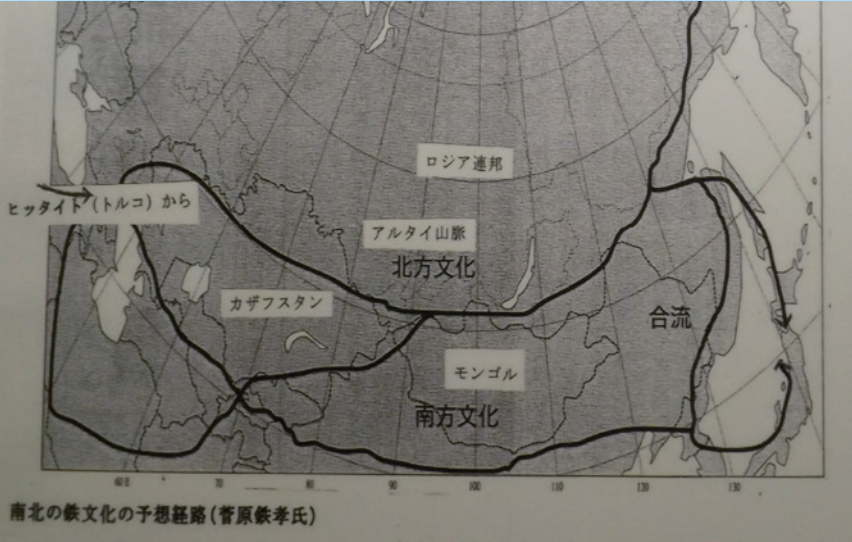
あまりのうれしさに、勢い込んで日本刀は東北で産まれたことなどを話した。いま思い返すと、筆者の機関銃のようなトークでさぞや驚いたことだろうと反省している。

が今回の企画展示につながった可能性もある。それがもし真実なら、まんざらでもない。

「奥州舞草刀とみちのくの名刀」展

今回の展示企画説明には一関市の舞草(もくさ)という地域に居住し奥州藤原氏のお抱え刀工であったといわれている刀鍛冶集団が鍛えた刀を「舞草刀」という。舞草集団が作刀した奥州舞草刀(舞草・宝寿・月山)とみちのくの名刀を中心に諸国の名刀を二十二振展示とある。特別展示として名工として称される「藤四郎吉光」も展示とある。

十四世紀の「玉寿」と「舞草」の最古刀は無駄な装飾



東北の歴史にとって、鉄の伝播は教科書で習った通りでいいのか?・・・中鉢美術館より画像借用

なく、素朴で力強い日本刀で筆者の好みである。特別展示の短刀「吉光」も印象深かったが、筆者は東北刀の伝統を感じた。

この見学が古代東北の刀工の声を呼び覚ます

しばらくしてから、筆者の内に、名状しがたい気持ち湧き起ってきた。東北で日本刀のすばらしさを愛でる展示が行われているのに、なぜ古代東北の刀工たちのことに触れないのだろうか。

意に反して、西国の鍛冶現場に連れていかれ、そこで作刀を命じられた古代の東北鍛冶たち。その悲しみと望郷の念と怒りとが、前述の映像作品

を制作したときと同じように急に体内に湧き上がった。そして、日本刀は東北で誕生したという日本刀の東北起源説、その説が時の権力で捻じ曲げられてきた歴史、さらには東北日本刀の文化そのものさえ盗まれていくプロセスを思った。それらを広く伝えたくなつたのである。

東北で日本刀が誕生した数々の証拠

まず、日本刀の最古刀に分類される平安時代に作刀されたものは多くが東北産である。なかには九百年前のものもある。日本刀の祖形といわれる蔵手刀(わらびてとう)から太刀に至るまでの日本刀の系譜が東北内の発掘遺物や作品でトレースできる。

西日本で発掘される多くの直刀タイプから湾曲刀である日本刀は作れない。東北には刀鍛冶場跡がた

くさん見つかった。東北の古代日本刀の素材は鉄鉱石であり、その鉄鉱石は東北ではいまでも産出する。

日本刀の西日本誕生説の弱み

これに対し、日本刀西日本誕生説はどうだろうか? まず、広く流布されている日本刀の出雲誕生説だが、ここには大きな弱点がある。出雲で大量の鉄鉱石を産出する話は聞いたことがない

ので、素材の砂鉄から日本刀をつくるのだが、それが出来るようになったのは、はるか後代のことであり、古代日本ではない。なぜなら砂鉄を溶解させるには千二百度以上の温度が必要だが、古代にそうした高温の製鉄炉は存在しなかった。

西日本では直刀はよく発掘されるが、東北のような九百年以前に作刀された日本刀はない。西日本では弥生時代から製鉄が行われていたような説があるが、最初は鉄製品そのものを輸入していた時代があり、その後、鉄の小さな塊を輸入して、それを加工して小さな工具にしていた。その期間は長く、製鉄そのものを行うには時間を要した。

二つのDVDを先にご覧いただければと思う。少なくとも論点がしばらくれてくるはずである。日本刀文化を奪われ続けた東北に誇りを持って

これらを追求めていくと、定説と思われる鉄や日本刀に関する定説が、どんどん崩れていくはずだ。ついでに日本への鉄の伝播ルートも見直した方が良く思う。ユーラシア大陸

の地図を見たら、南ルートだけというのは奇妙である。こうして見ると、浮かび上がるのは古代東北の先端技術、現代にも通じるその文化がいかにすばらしいかである。古代においてこうしたものを産み出したのは東北なのである。



この絵にある鬼は東北から連れ去られた刀鍛冶の姿だ...岩手県博物館所蔵の鍛冶神図

埋もれた古代史発掘ドキュメンタリーシリーズ 第一弾 鬼がつくった日本刀



日本刀のルーツは古代東北にあり! 数多くの資料を丹念に読み込み、多くの名刀を展示する宮城県北部の中鉢美術館の協力を得て、また宮城県北部の数々の遺構を尋ね歩いて制作した日本刀の定説をくつがえす歴史ドキュメンタリー映像。古代の奥州刀鍛冶は強制移住を強いられ全国に送られ、そこで作刀した。そうして日本刀が全国で作られたのだ。しかし彼らは「鬼」とさげすまれた。そうした境遇にもかかわらず、数々の名刀をつくり上げていった。その埋もれた歴史の発掘ドキュメンタリー

【上映スケジュール】
東大和市民会館ハミングホール「小ホール」
(〒207-0013 東京都東大和市向原6-1) 西武拝島線「東大和市駅」より徒歩7分
2020年3月26日(木) 開場18:40 上映開始19:00(300名定員)
2020年4月11日(土) 開場 9:40 上映開始10:00(300名定員)
埼玉県SKIP CITY 影の国ビジュアルプラザ 映像ホール
(〒333-0844 埼玉県川口市上青木3-12-63) JR西川口駅より徒歩9分
2020年4月1日(水) 開場18:30 上映開始19:00(定員350名)
上映時間:約60分 入場料:500円(税込) 全席自由席

2020年3月下旬からDVD販売開始
問合せ先:株式会社遊無有 mail: y.s.yumuyu@ozzio.jp
撮影協力:中鉢美術館(宮城県大崎市岩出山)
企画・制作:株式会社遊無有 制作指揮・プロデューズ:砂越豊
撮影・編集:株式会社チャーリービー

『鬼がつくった日本刀』パンフレット

柄に、東北は誇りと自信を持つべきであり、その誇りと自信があれば、東北再興はけっしてむずかしくないと考えることである。



古代東北は「鉄王国」だったが、みな朝廷に奪われてしまった。いまはその事実さえ忘れ去られている・・・『奪われた古代鉄王国』のDVDパッケージ

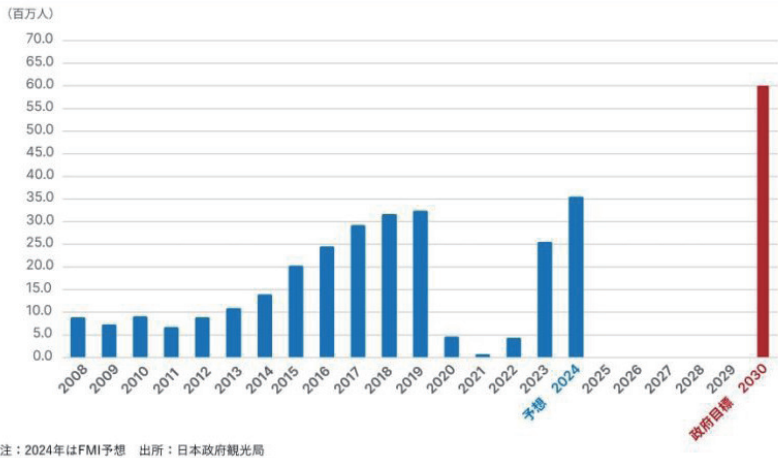
東北のオーバーツーリズム対策は万全か？

全国で一部の海外観光客による傍若無人な振る舞いにお手上げ状態だが、東北はいますぐ有効な対策を討てるのか？

インバウンドによる観光収入は激増だが、

近年のインバウンド効果はすさまじいものがある。昨年の訪日客の消費額は八兆三千九百九十五億円、客数は三千六百八十六万九千九百人でも過去最高となった。好調な訪日客の消費が、あまり良いところのない日本経済を支えている格好で、これが一挙に消費すると大変なことになる。その消費規模は、円安効果も下支えして、国内のアップル業界の市場規模並みの消費額となった。グラフを見れば一目瞭然だが、とにかく伸び率がすごい。かつてはとも考えられ

図表1 インバウンドの推移 (百万人)



インバウンドの推移・・・出所：日本政府観光局より

ないような展開であり、全体としてもこの流れに追いつけていない印象がある。

筆者の東京都内体験

筆者のお粗末な体験でまことに申し訳ないが、休日に銀座に出てコーヒーでも飲んでひと休みしようと思つたら、何と一時間半待ちと言われた。

ウィークデイの新宿では込み具合は銀座ほどではないが、それでもすぐには席が見つからず、あちこち探して、地下の目立たない店で何とか席を確保したくらい混んでいる。食事はさらに大変で、予約でもしなければとても無理である。この先も同様の状況が続

観光地分散

以前は海外からの観光客といえば、京都などの古都観光、東京観光と行き先がほぼ固定されていたが、最近はいきなり新規の観光地に殺到して土地の人々を驚かせている。この傾向は今後ますます顕著になるであろう。観光客個人のSNSによる観光地推薦投稿などで、一挙に大勢が押し寄せる構造である。

それは食べ物、イベントなど多種にわたっていくことだろう。観光地関係者の本音としては、「来てもらって、お金を落としてくれるのはうれしいし、期待したいが、けれども予告なしに殺到するのは勘弁して欲しい」ということではないだろうか？と

東北にもすぐ来る

他の地方に比べれば、東北は海外観光客の出足が遅いようだ。しかし、筆者は東北にも必ず来ると言おう。

すでに岩手県盛岡市にも観光ブームが突然やってきたのがニュースになった。

先月、仙台市の高台にある青葉城跡に行ったが、すでに海外からの観光客がたくさん来ていた。周遊バスの客も大半が海外からの観光客だった。

したがって、こうした流れは当然加速して、もっとすごいことになるだろうと確信する。

ただ、東北にはたくさん観光地があるが、仙台市のようにこれまで有名であれば、観光客対応も慣れているであろうが、その他のあまり有名でない観光地、もしくは非観光地ではどうなるのかと心配である。人の良い東北人がひどい目に遭わないように祈るだけである。

歓迎できないオーバーツーリズム(観光公害)

インバウンドはメリットだけではない。デメリットもある。その主なものは「オーバーツーリズム(観光公害)」である。そのなかでも、最近では驚くべき内容のものもあり、少し紹介しよう。

① 京都の例

つい先日ネットニュースには大いに驚かされた。高台寺岡林院(京都市東山区)が観光客のマナー違反を注意したところ、「中国の一部になるのに偉そうにしてたら消されるよ」などと言葉を浴びせられたと嘆いている。

でいた乗用車に「近くのコインパーキングに入れてほしい」と注意したところ、アジア系の人物から外国人なまりのある日本語で「白タクじゃねーよ！殺すぞー！」と大声を上げられたという。ここまでくるとオーバーツーリズムの範囲を越えていると思う。

また、京都では、観光客がバス停に長蛇の列を作り、地元の人々がバスに乗り切れない状況が多発したため、その対策として、「バス1日券」の販売を廃止し、バスの利用も昨年で停止した模様。

② 北海道の例

さっぽろ雪まつり会場での迷惑行為も言語道断である。動画配信しながら外国人男性が会場スタッフの顔面にいきなり「雪玉」を投げつける暴挙に出た。

あまりの暴挙に、別の外国人がとがめたが効き目なし。「こいつら、低レベル」だ(外国人の男性)と侮辱するような発言もしたようだ。

③ 鎌倉の例

人口約十七万人の鎌倉市の昨年の延入込観光客数は約千九百九十六万人で、この驚くべき数字は、バスケットボール漫画「スラムダンク」の海外における人気に影響しているとのこと。それにしてもすさまじい。

江ノ電の踏切周辺は撮影目的の外国人観光客らが常にいるスポットとなり、迷

惑行為が相次いでいる。車道に飛び出している写真撮影やゴミの放置、騒音などのトラブルが増えて警察に通報が寄せられ、近隣住民からは、土日や大型連休に限っている警備員の配置を平日にも実施するよう求める声が上がっているとのことだ。

こうしたオーバーツーリズムは、こうした例にとどまらず、数えきれないくらい存在するのだろう。東北では絶対に起きないことを祈るのみである。

海外の観光地の対策

では、すでに大勢の海外観光客が押し寄せる外国のオーバーツーリズム対策はどういうものがあるか見てみよう。

① イタリア

ローマ市では二〇一九年七月に条例が改正され、歴史的建造物に座ることや飲食すること等が禁止となっている。具体的にはトレビの泉のへりに座ること、スペイン階段に座ってアイスクリームを食べることなどが取り締まられている。他にもキャスター付きスーツケースを転がすこと、上半身裸になることなど禁止事項が細かく定められ、違反した場合の罰金は最大四百ユーロ(約四千七千円)とのことである。

一見厳しすぎる対策に思えるが、イタリアには年間約六千二百万人の観光客が押し寄せ、都市部の家賃高騰や交通渋滞、騒音、ごみ問題など、地元の人々の生活が脅かされている。また、重要な文化財の保護のためにも厳しい条例で取り締まられていくしかないようだ。

また、ローマ近郊の村では観光客用と地元住民用の駐車場が分けられており、基本的に観光客は村内への車の乗り入れが禁止。入村料五ユーロを徴収する村もあるようだ。

ヴェネツィアでは宿泊しない観光客に対して入域料を徴収。価格は変動制で夏のハイシーズンで十ユーロ(約千三百六十五円)、冬は三ユーロ(約四百十円)程度となる見込み。

② スペイン

バルセロナには年間約三千二百万人の観光客が訪れ、それは同市の人口百六十万人の約二十倍に上る。そこで市全体で観光客数を削減する対策に乗り出している。

観光客の宿泊を目的としたマンションの固定資産税を引き上げ、新たな創設を禁止。貸し出し可能な部屋数に制限をかけている。また新たなホテルの建設を禁止する法律も可決されたとのことだが、当然大きな反発があったようだ。バルセロナの例を受けてマドリッドでは観光客数を減らしながら、観光客1人

当たりの消費額を増やす取り組みが行われている。民泊を規制していく一方で、反対に高級ホテルの誘致を行っている。バルセロナから撤退したフォーシーズンズや、マンダリン・オリエンタルやオラヤンゲループなど、高級ホテル側もマドリッドへの進出に積極的とのことだ。

オーバーツーリズム対策の決定打はない

このように世界の各観光都市ではさまざまな工夫を盛り込んだ対策が打たれているが、日本のインバウンドのレベルとは格段に違い、すさまじい観光客数である。それほど早く、オーバーツーリズムは世界のあらゆる観光地でここ数年になつて問題視され始めたため、まだどの地域もこれが正解だと言える対策は見つかっていないのが現状のようだ。しかし全体の傾向としては観光税や入場料を徴収する、予約制を導入するなど、対策が多い印象とのこと。

また、方針としては観光客数を減らして一人当たりの消費額を増やすというものが多いらしい。

* 東北も、オーバーツーリズムで苦しまないように、なるべく早急にオーバーツーリズム対策研究に着手し、対策を打つべきであろう。

「兵どもが夢」とは 何だったか

年一回の「平泉学フオーラム」開催

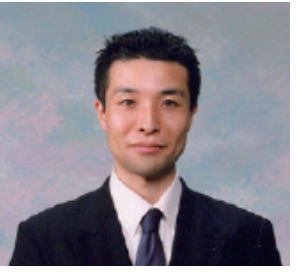
二月二日、第五回平泉学フオーラムが一関市内で開催された。前身の平泉文化フオーラムが毎年この時期に二〇回開催され、平泉学フオーラムと名称が変わって今回で五回、合わせて二五回。平泉の文化遺産に関する最新の調査や研究成果を一般の人にも分かりやすく伝えてくれる貴重な機会が四半世紀続いていることになる。

世界遺産の教材化

今回も東京大学史料編纂所教授の高橋慎一朗氏の基調講演「中世都市史研究からみた平泉」に始まり、共同研究に関する報告が五題、調査成果の報告が三題と盛り沢山な内容であった。その中で興味深かったのは、岩手大学教育学部と岩手県教育委員会の共同研究「日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究」であった。両者はこれまで五年間に亘り、このテーマについての研究を共同で進めてきた。その研究成果は「探求・平泉の文化遺産」として、岩手大学のサイト内で公表されている。学校教育の中の「探究的な学習」に対応したデジタル教材と

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouchi.ohtomo

なっており、大事なワードについては太字・下線で示されてクリックすると情報が確かであるサイトに飛ぶようにできている。

「平泉文化研究の現状について」広く情報を発信し、多くの方々に平泉文化研究に身近に接して頂くことを目的として以来、年一回開催され続けてきたわけである。

「兵どもが夢」とは

「芭蕉が詠んだ『兵どもが夢』とはどんなことだったか」であった。前者は当時の東北が産金地であったからと短絡的に考えてしまいがただが、話はそう単純ではない。当時の金は貨幣的価値のあるものではなく、像に鍍金するためのものと捉えられていたのである(宋との貿易が盛んになるにつれて貨幣的価値にも注目されていった)。もちろん特産物には違はなく、京の都では珍重されただろうが、それだけでなく、駿馬や北方交易で入手できた様々な特産物の存在など、いろいろな角度から考察していかないといけない良問である。

「平治の乱」における 頼朝の主張

ちよつと前に読んだ「平治の乱の謎を解く」頼朝が暴いた『元全犯罪』(桃崎有一郎著、文春新書)が面白かった。平治の乱についてはこれまで保元の乱以後に権力を握った藤原信西に反抗した藤原信頼が保元の乱での恩賞に不満を抱いていた源義朝と図って起こした、二条天皇親政派が画策して起こしたなど、様々な見方があったが、この書で桃崎氏は、父義朝と共に乱に加わった頼朝が、その三一年後に九条兼実に語り、兼実が自身の日記「玉葉」に書き留めたその言葉から、平治の乱の真相、それを踏まえた鎌倉幕府の位置づけについて、緻密な論考を展開して読み解き直している。

「兵どもが夢」とは

そして、後者の「兵どもが夢」とは何だったのかという問いに私はハッとさせられた。と言うのは、件の芭蕉の有名な句「夏草や兵どもが夢の跡」であるが、私はこれまで五七五の区切り通り、「兵ども」が「夢の跡」になってしまったと解釈していた。つまり、昔確かにここにいた「兵ども」は夢のように消えてしまって、今

は夏草がその跡に残っているだけ、という意味だと思つたのである。

しかし、そうではなく、「兵どもが夢」でひとまとまりと捉えると俄然意味は違つてくる。「夏草」は、「兵ども」の跡ではなく、「兵どもが夢」の跡ということになるのである。では、「兵どもが夢」とはどんなことだったのだろうか。これを「探究的な学習」の中で考えさせるのは、様々な捉え方が出てくるのが予想できて、これまた良い問いだと思つた。

ところが、芭蕉が「夏草や兵どもが夢の跡」と詠んだその「兵ども」である奥州藤原氏、あるいはそこにいた源義経、それらの人々については、当人たちの言葉がほとんど残されていない。元々はそうした記録が残っていたのかもしれないが、奥州藤原氏が滅んだ文治五年奥州合戦の際に、政庁であった平泉館は焼失してしまつたので、記録の類は全て灰燼に帰してしまつたのだらう。そうした中で「兵どもが夢」が何だったのか考へるのはなかなか難しいお題である。

奥州藤原氏の考えたこと

奥州藤原氏の主義主張が読み取れるものとして僅かに挙げられそうなのは、この連載でも何度か紹介している初代清衡による「中尊寺供養願文」の他は、「吾妻鏡」に記載のある三代秀衡の遺言(文治三年十月二十九日条)、四代泰衡が頼朝に宛てた手紙(文治五年八月廿六日条、捕

清衡の自己認識

もう一つ注目したいのが、「弟子(ていし)清衡は東夷の遠西(おんしゅう)なり」との言葉である。自分は都から遠く東に離れたところにいる蝦夷の酋長であるというので、これは藤原が治める土地や人民とは違う土地や人民を治めるリーダーであることを朝廷のお陰であるという形を取りながら明確に主張しているのである。

「兵どもが夢」とは何だったのか

ここまで見てきたことをまとめてみると、奥州藤原氏初代清衡の「兵どもが夢」とは、以下のようなことになり、清衡は戦乱に明け暮れた陸奥と出羽で心ならずも命を奪われた全ての存在を皆平等に浄土に導こうと考え、それだけでなく今自分たちがいるこの地をそのまま浄土とすることを考えて、中尊寺を建立した。また、清衡は表向きは朝廷に従う姿勢を取りながら、陸奥と出羽、ひいては朝廷の支配が届かない海外の民まで含めた異民族のリーダーとしてそうした「兵どもが夢」を推し進めていくというの答えである。

らえられた泰衡の郎従由利八郎の主張(文治五年九月小七日条)くらいである。

「中尊寺供養願文」は、現在の中尊寺境内にあつたとされる鎮護国家伽藍一区について、その中身や趣旨、そこに込めた思いなどを説明している。文章にしたのは当時の文書博士藤原敦光であるが、その内容には当然清衡の意向が反映されている。この鎮護国家伽藍一区が畿内以外に建立されたのはこの中尊寺が初めてという画期的なことで、そこには清衡の並々ならぬ思いがあつたと見て間違いない。

全文をここに載せることはできないが、私が注目している箇所を挙げていくと、まず以前も紹介しているが、二階鐘楼についての、「この鐘の音は、世界のあらゆる所に響き渡り、苦しみを抜き、楽を与えること、あまねく平等である。官軍の兵も蝦夷の兵も古来より多く亡くなった。毛を持つ獣、羽ばたいたる鳥、鱗を持つ魚も数限りなく殺されてきた。その精魂は皆あの世に去り、骨は朽ち、今もなおこの地の塵となつている。鐘の音がこの地を響かせる毎に、罪もなく命を奪われた霊を、浄土に導かせる」というくだり。ここで清衡は、敵味方問わず、人間であるかどうかも問わず、罪なく命を奪われた霊を皆平等に浄土に導くこの思いを告げている。

「兵どもが夢」とは何だったのか

すう)たりといえども、界内の仏土と謂うべし」という言葉。「徹外の蛮陬」は境界の外の辺境の地の意味である。「界内の仏土」の「界内」という言葉は、一般的にはある一定の地域の内側という意味で、その意味だと単に「境界の外の辺境の地(東北)であつても仏土の内側と言ふべき」と言っているようにも思える。しかし、「界内」には実はもう一つ重要な意味として、欲界・色界・無色界という、一切衆生が輪廻して生死を繰り返す三種の境界の内側という意味もある。「界内」がそちらの方の意味だと解釈するとこれは、「境界の外の辺境の地、我々が生き死にを繰り返すこの迷いの世界を仏土と言ふべし」という意味になる。すなわち、罪もなく命を奪われた霊を浄土に導くのみならず、我々がいる辺境の地そのものを仏土となすという「此土浄土」、「現世極楽」の主張である。

この清衡の思いが実際に行動に移された証と言えるのが、吾妻鏡の文治五年九月小十七日条に記載されている「寺塔已下注文」である。これは清衡以下三代が建立した寺社の中尊寺と毛越寺の僧が文書にして頼朝に伝えたものであるが、そこに中尊寺については、「清衡、六郡を管領するの最初にこれを草創す」とある。つまり、清衡が六郡を治めることになって最初にやったことが、自分の館を造ること

でも外敵に備える砦を造ることでもなく、中尊寺を造ることであつたことが明確に記載されているのである。清衡のこの地をまるごと浄土にするという思いが並々ならぬものであつたことが窺える。

「兵どもが夢」とは何だったのか

「兵どもが夢」とは何だったのか

「兵どもが夢」とは何だったのか

世界が「ねぶた」を目指すー？ 日本、その真の中央への旅の事

最近、「ねぶた」がやけに熱い。否々、この真冬にそれも今拙稿を執筆中のまさにこの時、例年のない豪雪に悩まされている日本海側特に青森県に対して、今ねぶたを連想する事など到底できないように思えるではないか。確かに現状の東北・青森はかの真夏の祭典世界でも有数の「爆発的」大イベント・ねぶたには真に遠き氷の世界である。

しかし、それは裏腹にインターネット上例えば動画サイトに於いて、自身が東北関連の検索を掛ける事の多いせいもある。か日々自動的に表示される動画の中に、青森ねぶたの話題が少なからず見られるのだ。個人的に気に入っている



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

「ねぶたの真実」と名乗る青森ねぶたにおける「ハネト」の衣装に身を包んだ美人さん(元アイドルだとか)で東京在住ながら津軽弁と青森県民の魅力を日常的に伝えてくれる。また最近山形県酒田市在住の男性に嫁いだフランス人女性アマンド・マリーさんや北海道在住のロシア人女性アリョーナさんが各々祖国にて幼少期より憧れていたというねぶた祭の観覧が遂に実現し涙を流して感激する様子にも触れ、ねぶたとはそれ程までに凄いのであつたかと思ふ。あつたかと思ふ。あつたかと思ふ。あつたかと思ふ。

青森ねぶた、況や東北に生まれた人間においてをやる。私の個人的な青森ねぶた初見は、実はねぶた祭本番ではなく、数日に渡る祭行事が終わった後の締め行事である、受賞ねぶたの海上運行と、その上空での盛大な海上花火大会としてであった。当時まだオートバイでの旅は始めておらず、初めての地に鉄道で滑り込んで宿もやつの事で街外れのビジネスホテルを押さえたという具合で、確か仕事の関係で本祭に間に合わなかった無念さもありながら、見た事もない壮観な花火の連打とともに海上を流れていく巨大なねぶた山車に感激して至極充分な体験であつたと満足した記憶が残っている。

事から、そうした共通の経緯を持つ東北三大乃至四大祭の中でもとりわけ特異であり、また北海道への通過点でもある青森市のねぶたは旅人・移動者らの思惑と密接に結び付いてきたイベントと言えよう。

近年、アイヌ文化への関心が高まりその民族舞踊も広く知られつつあるのに加え、かつて東北から多くの移住者を輩出した北海道には無論鹿踊りなどの東北の祭文化がいくつかが伝わっているが、現在のところ全国区に知られる道内の「動的」な祭のイベントとしては、道外からの学生が四国文化要素を導入して始め、今や全国各地に波及した(同時にその参加者マナーなどから発祥地札幌始め各地で悪名高い)「よさこいソーラン祭」ぐらしか思い浮かべない状況である事であつて、津軽海峡を跨ぎ旅をする者らにとつては青森ねぶたは唯一無二の特別な祭行事なのである。

青森ねぶたと旅人らの繋がりを最も特色づけるのが北海道を舞台に長い移動の旅を繰り返す自転車やオートバイに乗った貧乏旅の若者らの参加である。

そもそもは七〇年代から急増していった、北海道旅のライダーらが青森港での乗船に数日待ちの状況となり、港付近の芝生にいつしか「テント村」を形成してしまつた事に端を発する。その昔、東北について考

察したある書物にて、哲学者・梅原猛と作家・中上健次両氏が既に高年齢ながら、「ハネト」として意気揚々と参加した様子を捉えた写真を目にしたのが私のねぶたを知った瞬間であつた。ハネト―それは、巨大な物語絵の立体化である山車の前でひたすら跳ねまわるといふ、極めてシブシブな祭をすこぶる躍動的なものへ昇華する重要な存在だ。

現代の旅人らの多くも、独特の派手な浴衣に身を包んだ姿でオートバイに乗り込み、大挙して会場へ向かうその列を、自転車旅の組が各々の自転車を持ち上げ雄叫びとともに送り出す―その姿が今や風物詩ともなつていのだが、私は実のところ一度も参加して一緒に眺めたいと思つた事がない。眺めたいと思つた事がない。眺めたいと思つた事がない。

近年、青森ねぶたは東北六魂祭(転じて絆まつり)を始め、大洋を越えてイタリヤ、米・ニューヨークまで遠征、また国内でも群馬や千葉、長崎そして北海道各地など地域に定着した例も数多いが、当然というべきか山車の規模は本場のものより縮小されたものであり、本来の迫力を感じたければやはり発祥地へ赴く他はない―こうした点は秋田の竿燈や山形の花笠踊り、岩手の鬼剣舞などでも同様ながらあるいはそれら以上にその存在を知つた者を東北の地へ憧憬させずにはおかない魔力でもあるのだ。

こうしたものは、例えば私がこれまで何度となく東北と照合してきた英国スコットランドなどにもなく、世界に類似した祭文化もない。これが東北の入口に近い福島や仙台ではなく、中央より最も遠い本州の最果て、北海道・東北云わば「南北両蝦夷地」のど真ん中に存在するという事こそが、日本における地方の底力を象徴するもののようにすら思えるのである。

以前拙稿で東京へ集中し続けた果ての人々は次にどこを目指し向かうのか―という問いかけをしてきた。最近見つけた、若き論者・谷頭和希氏の『都会きらい』というネット上の連載によると数年前の地方移住ヤー企業やフリーランスなど特定の働き方限定のものだつたが、近年はコロナ禍を経てより一般に浸透し云わば「地方移住の民主化」が起こつているという―特に所謂Z世代に当たる若者達の地方への視線には名状し難い熱量と「深み」が増しつづけているのだ。

東京含む大都市圏に住むの彼らの半数近くが地方移住を検討しているというJ A 共済連の調査結果があり、うち四人に一人が「農業をやつてみたい」と答えているという。また「じゃらん宿泊旅行調査」では若者達の旅行スタイルが他の世代に比べても体験型や地元民との交流を重視した地域への密着度の高いものになつており、移住の検討目的と見られる旅行が明らかに増えているというのだ。

政府は、早急に各地方の農林漁業の労働環境整備に総力を上げ、「都会に嫌われている」若き有志たちの分散と勇躍を全力で奨励すべきである―それにしても何故彼ら世代は地方に「深さ」を求めるのか。それは大都市圏に住む彼らにとつて地方がメディア上の存在になりリアリティを失つて「エンタメ化」してしまつているからだと言つてもいい。大都市の内側で「地方消滅」「地方創生」の各論が發生・対立・分裂の力オスを巻き起こす中で、若者らは自らの脚で、各々の真実と未来を見極めに旅立ち始めたのかも知れない。

かつて、北海道を目指した旅人らが思いがけずその心を奪われた、青森のねぶた―それはきつと、定説の通り七夕の灯籠流しから始まりつつも、恐らくはかの縄文の時代の土器に刻まれた激しき造形と同様「何が我が心を揺さぶるのか」という果てしなき追究の情熱と、荒ぶる冬・理不尽なる悪政や災厄への反動の所産・無意識なる反骨の証、蝦夷の国「日本中央」の祭は、旅の形を変えた新世代を、これからの未来どのよう



ねぶた海上運行を彩る花火(青森県観光情報サイトより)



春待つ水車小屋



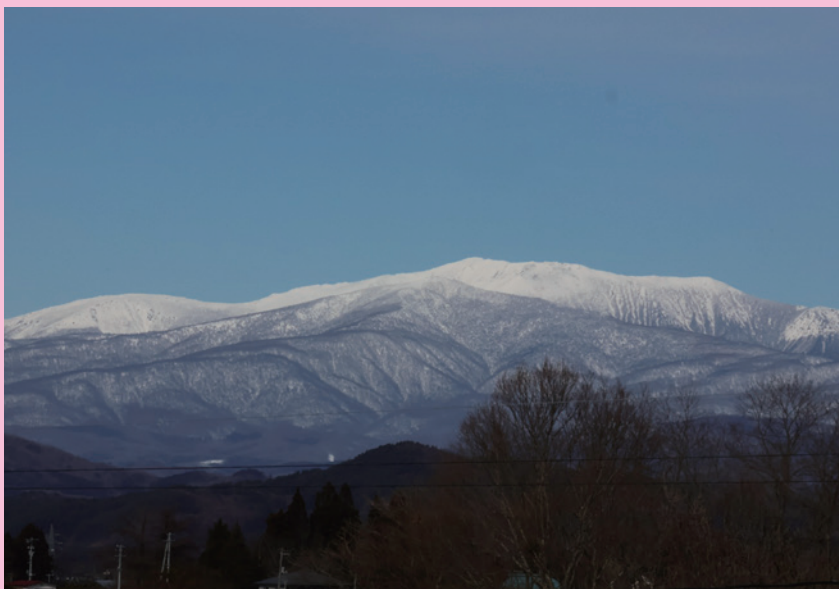
雪景色の境内



どんと祭



焼納



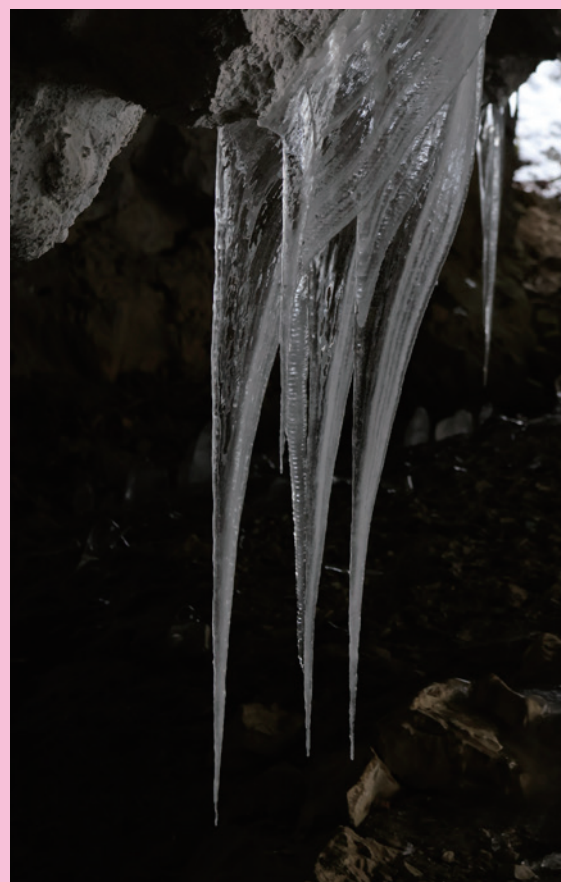
晴天日の早池峰山

シリーズ 遠野の自然

「遠野の立春」

遠野 1000 景より

暦上は立春であるが、実際には一年で一番寒い季節がやってきた。
遠野ではマイナス十八近くになったこともあるようだ。その気温だと、「寒い」というよりも「チクチクと痛い」なんだろうと思う。
最近では日本海側では大雪だ。昨年夏に騒がれた「線状降水帯」ならぬ「線状降雪帯」というのだそうだ。正式名は「日本海寒帯気団収束帯」と長たらしい。
大雪は日本海の温暖化が影響しているとも噂されているが、よく分からない。
規則正しい自然の運行には長い伝統に培われた対策があるが、その運行が乱れると人々は緊急対応を探し求めて右往左往する。



洞窟内のツララ



氷筍



つららと氷筍

新シリーズ【東北を再発見する旅】…①6 宮城県「閑上(ゆりあげ)」 閑上にある小高い丘にのぼり、津波で流された周囲一帯を見た



閑上地図・・・東北応援たび2より

宮城県名取市の閑上(ゆりあげ)地区に行ったのは東日本大震災発生から三年経過してからのことだった。もっと早く行こうとすれば出来たはずであり、あんなに遅くはならなかったはずだが、自分でもなぜだか分からないが、なかなかそこに行こうという気持ちになれなかった。

この地域は大津波による犠牲者が多数出たところだった。
* その地域に入るとすぐに目に入ってきたのが大きな寺の建物だった。よく見ると、内部は津波で破壊されていて、建物の外部のみが残っていた。
さらに再建したばかりの道路を進むと、あたり一帯がどこまでも広がる平坦地のなかに、高さがわずか六

メートル三十センチの小高い丘があった。日和山と呼ばれているらしい。
その低い丘が突出して目立つほどに、周囲は真っ平な地域だった。
そこに高さ九メートルの大津波が襲ったのだから、ひとたまりもない。高さ六メートル三十センチの日和山も軽々と越えていったのである。そして多くの犠牲者を出してしまった。
現場を見てつくづく思ったのは、もしこの地域に四階建てくらいの中層の鉄筋コンクリートづくりの建物が複数あったとしたら、そこに逃げ込むことが出来たはずで、犠牲者はもっと小さくて済んだかもしれないということだった。
* また、大震災から三年経っても、新たに建設された



閑上地区で最も高い丘

ような建物はひとつも見えなかった。
被災後の移住地をどこにするかで地元住民の合意が形成されなかったためであるという話を聞いたことがある。
確かに、周囲はどこまでも平坦な地であり、再び大津波が襲ってきたら逃げようがない。しかも、大津波の記憶は新しい。だから、「高台」であることが移住地の絶対条件なのだ。
そうすると、移住地はおのずと、かつて暮らしていた平坦地からかなり離れた高台にある場所となる。
そうなる選択肢が複数あるのは当然で、意見が割れるのは当然である。
* 小高い日和山に登ってみた。そして周囲をぐるりと見てみた。低い丘なのに、



丘から津波で流された場所を見る



一束の花が供えられていた

遠くまで見渡せる。
その光景は、何にもないのに逆に、なんとも痛ましい光景に見えた。
多くの犠牲者を出した、その当時のままのむき出しの景色が、かつてのものすごく悲惨な被災体験を現実感を持ってストレートに伝えてきたように感じたのだ。
* 日和山を下りて、あたりを散策した。
すぐに目に飛び込んできたのは、家屋の土台だったらしいものがむき出しで残っている元宅地に供えられていた花だった。
あまりにも悲しい光景であった。
次に見たのは、破壊されたお墓だった。
普段見慣れている上部の墓石部分はなく、お骨を収納する納骨スペースがむき



再開したゆりあげ港朝市



津波で破壊されたお墓

出しになっていた。
大津波が墓石部分を押し流したのであろうが、何となく巨大な力なのだろう。
その津波の力といえば、道路わきに立っていたはずの鉄製のポールが、根元から振じられながら折れているのを見た。これもすさまじい津波のパワーである。
* 日和山から少し離れた場所に「ゆりあげ港朝市」という看板のある建物があった。
元々は、昭和五十一年に、閑上漁協の敷地内で自然発生的に誕生した建物だったが、平成二十三年の東日本大震災で閑上地区も甚大な被害を受け、市場も一時閉鎖していたようだ。
その後、イオンモール名取駐車場で仮営業を経て、平成二十五年から従来の敷地での営業を再開しようとしたが、訪問したときは店は

お休みだった。
閑上被災地での唯一の「生きていく人間」の活動する場所のように見えた。
そして、荒涼たる景色のなかで、ほっとしたのを覚えている。



写真でお伝えする
東北の風景
「釜石市郷土芸能祭
2024」
写真撮影 尾崎匠

